家畜衛生情報

県内で牛ウイルス性下痢・粘膜病が発生！

平成18年6月

５月末、県内で死亡した子牛を検査したところ牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD・MD）と診断され、さらにそれは持続感染牛であった可能性が報告されました。

● BVD・MDはどんな病気？

・健康な牛が感染すると

・・・一過性の発熱や軽度の呼吸器症状、一過性の下痢（軟便）

・妊娠牛は感染した時期により胎児への影響に差が出ます

胎齢60日までは胚の死滅、胎齢60日以降は死流産

胎齢90～120日の感染で、持続感染牛となる可能性あり

★持続感染牛とは

・常にウイルスをまき散らす感染源となります

・BVDウイルスの重感染で粘膜病を発症します

● BVD・MDの発生を予防するためには

ワクチン接種が有効で、以下のワクチンが使用されています

１　生ワクチン：１型のみ＝妊娠牛への接種はできません

２　不活化ワクチン：１型および2型＝妊娠牛への接種ができます

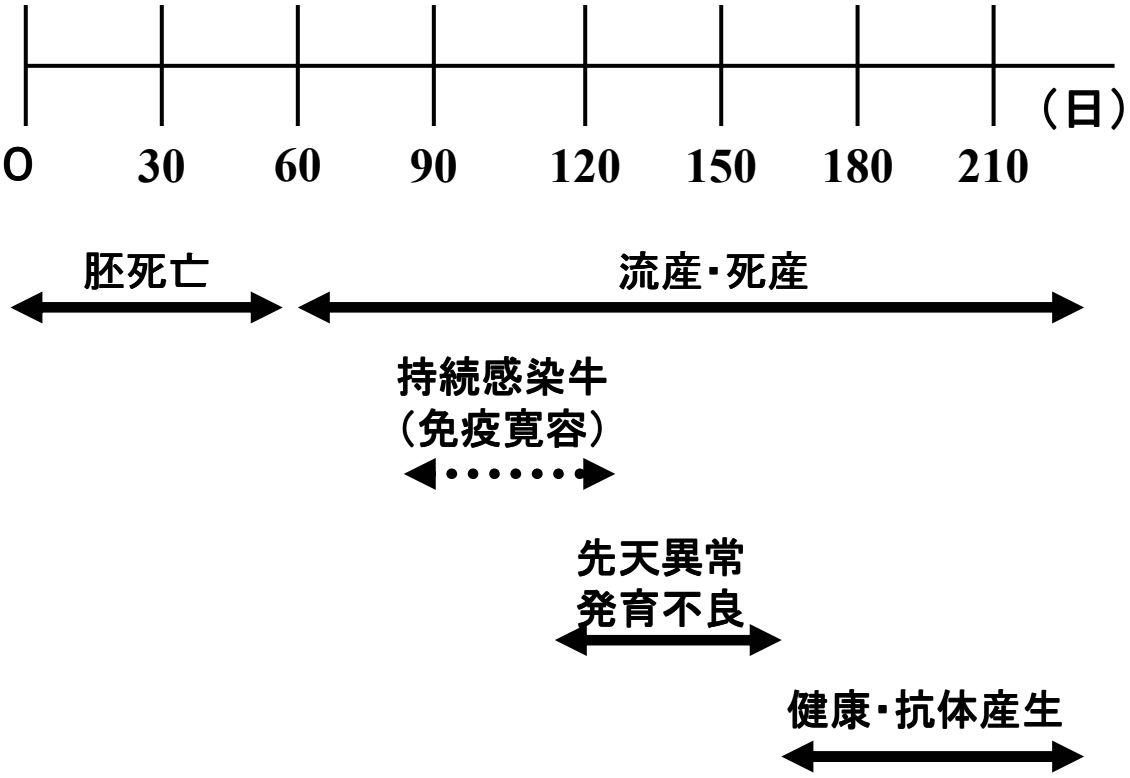
（裏面もご覧下さい）

飛騨家畜保健衛生所

TEL（0577）33－1111　FAX32－9019

E－mail：c24508@pref. gifu. lg. jp

胎児感染の胎齢と胎児への影響



BVDウイルス持続感染牛の問題

1　生産性が低下します

・慢性的な下痢が起こります

・複合感染や日和見感染症が起こりやすくなります

・致死的な粘膜病へ移行する場合があります

2　BVDウイルスの新しい感染源となります

・終生体内にウイルスを保持します

・鼻汁、糞便、尿中に多量のウイルスを排泄します

・胎児にウイルスが伝播され、新しい持続感染牛が出産されます

秋田県南部家畜保健衛生所HP参考